

神からの贈り物

川 畑 一 朗*

おもちゃ行商の男性

南部アフリカ、ザンビアの首都ルサカの路上を歩いていると、通りの向こうから三輪車のおもちゃ（写真1）を走らせた男性が歩いてきた。カラフルな服を着た運転手が白い車体に座るそのおもちゃは、前輪とペダルが連動した仕組みであり、おもちゃの運転手が自らペダルをこいでいるように見えた。

この男性は手作りのおもちゃを売り歩き日銭を稼いでいる、行商のダウト氏（仮名）である。彼からこのおもちゃを購入した私は、ある晩おもちゃを眺めていた。何から出来ているのだろう。そう思いながら私はおもちゃの各部位を撫でまわした。

感触から推測するに、車体は金属製のワイヤーにペンキが塗られたもの、運転手の身体



写真1 路上を走る手作りのおもちゃ

は紙粘土のようなもので肉付けし、その上から衣類とペンキで装飾が施されている。紙粘土はどこから入手するのだろう。ワイヤーはまっすぐでないが、新品なのだろうか。多くの疑問で頭がいっぱいになった私は「おもちゃを作るところを見せて」と彼にメッセージを送った。

おもちゃ作り

私のお願いを快く承諾してくれたダウト氏は、自宅に私を招きおもちゃを作る工程を一から教えてくれた。まずはおもちゃの骨組みを作ることから始まる。骨組みの材料はやはり金属製のワイヤーであり、彼は鉄くずリサイクル業者から中古のワイヤーを購入していた。

ワイヤーは住居のフェンスに使われていたものや廃電線を分解したものなどのスクラップ品で、ルサカでは1キログラムあたり4クワッチャ（当時1クワッチャあたり0.07～0.08ドル程度）で手に入る。ダウト氏はペンチで中古のワイヤーを一度まっすぐに伸ばしてから、各パーツの骨組みを作っていた。タイヤと運転手の頭は指の湾曲を器用に使って円形に、他のパーツはペンチを使って角形に整えていた。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

手際よくパーツを量産する姿に驚いた私が「これは誰でも作れるの?」と聞くと、ダウト氏は「そう多くはない。これらのおもちゃを作る技術は学校では教えてくれない。これは神からの贈り物なんだ」と得意げに答えた。彼は技術を才能だと捉えていると私はくみとった。

すべてのパーツの骨組みが完成すると、次は肉付けの工程である。「ワイヤーだけでは表現できない厚みをもたせるんだ。」そう言うと彼は、ダンボールに水を含ませてそれを両手で握りしめ、水気を取った。そして「ちょっと、ここで待ってて」と言い、彼は自宅の外に出て行った。

数分後、彼は隣人からもらったシマ(*nshima*)を片手に帰ってきた。シマはザンビアの主食であり、トウモロコシやモロコシ、シコクビエ、キャッサバなどを練り粥にしたものである。「お腹がすいたのかな」と思っていると、彼は家の奥から杵と臼を持ってきてそこにシマを入れた。次の瞬間、驚くべきことに彼はシマの入った臼に先ほど絞ったダンボールを入れ、杵でこね始めたのだ(写真2)。

どうやら私が紙粘土だと思っていたものは、今のような工程を経て作られる簡易粘土のようなものだったのだ。

ザンビア人はシマをこよなく愛しており、多くのザンビア人は毎食シマを食べる。そんなソウルフードを廃棄物のダンボールと混ぜ合わせることには、ザンビアでの生活が短い私から見ると少し抵抗があった。一方で、家族全員分を一度に作るシマは食後に残ること



写真2 シマとダンボールを入れた臼

もしばしばある。余りものを利用し材料費を抑えるという意味では、合理的な方法にも思えた。

シマとダンボールの色の境がなくなるくらいこねた後、ダウト氏は簡易粘土を運転手の骨組みにまとわせて、人型に整えた。「乾くのに天日干しで2~3日かかる。乾いたらペンキを塗るんだ。」そう言って、彼は簡易粘土をまと寄せた運転手4体を日当たりの良いところに並べた。確かにこのような特異な方法を思いつくのは才能かもしれない、そう納得した。

次に、彼はタイヤに手を伸ばした。家の奥から取ってきたビニール袋や古布をタイヤの骨組みに巻きつけ、鍋に火をかけ、タイヤをくべてプラスチックのつなぎ目を溶かし整えた。これで骨組みの肉付けは終了である。彼は、私に3日後に来るよう伝えた。

3日後私は彼の自宅を訪問した。「最後におもちゃを装飾するんだ。」彼はそう言って作業を再開した。乾いて固まった運転手の身体と車体、タイヤにペンキで色を塗り、安く手に入れてきた子ども用の衣類を切り縫

いし、運転手に服を着せた。その後、30～40分ほどでペンキが乾いたら最後に各パーツを針金でつなげておもちゃは完成である。

神からの贈り物

装飾のペンキが乾くまでの間、ダウト氏が「材料を集めに行く」と言うので、私は同行した。彼は家を出てすぐ近くの草むらに入って行った。ついて行くと、茂みには衣類やビニール袋、ペットボトルなどの廃棄物が投棄されていた。彼が骨組みの肉付けに使っていたビニール袋や古布、ダンボールは、路上廃棄物を再利用したものだった。感心して目を丸くする私に、彼はまた得意げに説明した。「僕のビジネスは、人が捨てたものを拾えばできるんだ」と。路上廃棄物は常に一定量落ちてはいるが、プラスチックがたくさん集まる時期とほとんど落ちていない時期とがあるようだ。誰かがいらないと捨てた廃棄物も彼からすると神からの贈り物なのである。

その後、彼の自宅に戻った私はペンキが乾ききるまでの間、彼のこれまでの人生について聞いた。御年 53 歳のダウト氏は隣国のジンバブウェやボツワナにも居住歴があり、おもちゃの販売はボツワナで失職した際に始めたのだという。ジンバブウェとボツワナでは、おもちゃの主材料のワイヤーでさえ拾い集められたが、ザンビアでは鉄くずひろいがビジネスであるため、そう簡単ではないらしい。ダンボールとシマの簡易粘土はジンバブ

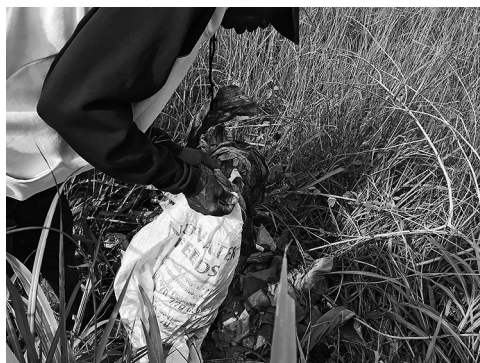


写真3 茂みからプラスチックを拾う

ウェに住んでいたとき、隣人が作っていたものをまねたそうだ。

「すごい、みんな天才だ」と私が言うと、彼は「生きていくには頭を使う必要がある。なぜなら、神は私たちに脳を与えたのだから」と言った。彼の言葉に私はハッとさせられた。彼がしきりに口にする「神からの贈り物」というのは、アイデアや技術ではなく、それを考える脳を指していることに気づいたからだ。彼が得意げだったのは自身の才能をおごっていたのではなく、それが考え抜いた結果だったからである。

手際のよい骨組みの作成はこれまでの長年の製作経験が成すものであるし、簡易粘土のアイデアも隣人の作製方法を応用できると踏んだ結果である。フィールドではそこに今ある結果だけで理解したつもりになるのではなく、そこに至るまでの過程も知り、自分自身で十分に吟味する必要があるようだ。なぜなら私たちに、神からの贈り物があるのだから。